

ほりさか

# 堀坂試掘調査

— 市内遺跡発掘調査事業報告書 第1集 —

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第74集

2004

津山市教育委員会





試掘調査地遠景 1 (南から)



試掘調査地遠景 2 (北から)





縄文土器（表）



縄文土器（裏）



## 序

津山市には、沼遺跡などの弥生時代集落から、市のシンボルである津山城跡など、数多くの遺跡が存在します。その中で、津山市の北東部に位置する堀坂地区は、これまで遺跡の存在がほとんど知られていなかった数少ない地域がありました。

今回の堀坂地区における試掘調査は、経営体育成基盤整備事業に先立ち、埋蔵文化財保護のための資料を得て、は場整備事業との調整を図るため、平成12年～13年度の「市内遺跡発掘調査等事業」として、国庫補助を受けて行われたものです。

限られた範囲の調査ではありますが、調査の結果、これまで津山市内ではほとんど見られなかつた縄文時代の遺跡のほか、弥生時代から中世に至るまで幅広い時代の遺跡が存在することが明らかになり、市内北東部地域の歴史を知る重要な手がかりを得ることができました。

本書はこの試掘調査の記録をまとめたものです。小冊子ですが、地域の研究の一助となれば幸いります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の作成に至るまでご理解とご協力をいただきました関係者各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

津山市教育委員会

教育長 松尾 康義



## 例　　言

1. 本書は経営体育成基盤整備事業 堀坂地区 にともなう堀坂地内試掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は国庫補助事業として、平成12年度、13年度にかけて津山市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は津山市教育委員会が担当し、津山弥生の里文化財センター安川豊史、農島雪絵が担当した。
4. 本書の執筆はI～IV-2（1）を農島、IV-2（2）を安川が担当し、編集は平岡正宏、農島がおこなった。
5. 本書に用いた方位は第V平面直角座標系の北で、レベル高は海拔高である。実測図に示した高さの単位はmである。
6. 本書第1図に使用した地図は、建設省国土地理院発行2万5千分の1（横）地形図を複製したものである。
7. 出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センター（津山市沼600-1番地）に保管している。
8. 本書は将来的にはオンラインでの公開も視野に入れ、本書の総てのデータをPDFフォーマット及びAdobe Indesign202形式で保管している。



## 目 次

I 調査の位置と周辺の遺跡.....	1
II 調査経過.....	3
1 調査に至る経過.....	3
2 調査経過 .....	3
3 調査体制 .....	3
III 発掘調査の概要.....	7
1 1次調査の概要.....	7
2 2次調査の概要.....	10
IV まとめ.....	31
1 遺跡の範囲について .....	31
2 出土遺物について .....	33
a 繩文時代後葉の土器について .....	33
b 石器について .....	34

## 挿 図 目 次

卷頭図版 1 - 1 速景	第11図 T 2-24~31平面・断面図 (1／80)
2 全景	第12図 T 2-32~39平面・断面図 (1／80)
卷頭図版 2 - 1 土層	第13図 T 2-40~44平面・断面図 (1／80)
2 土層	第14図 T 2-1~15出土土器
第1図 調査地と周辺の遺跡	第15図 T 2-21~25出土土器
第2図 トレンチ配置図	第16図 T 2-22出土土器 (1)
第3図 T 1-1~8平面・断面図 (1／80)	第17図 T 2-22出土土器 (2)
第4図 T 1-9~15平面・断面図 (1／80)	第18図 T 2-22出土土器 (3)
第5図 T 1-16~21平面・断面図 (1／80)	第19図 T 2-22出土土器 (4)
第6図 T 1-22~23平面・断面図 (1／80)	第20図 T 2-26出土土器
第7図 1次調査出土遺物	第21図 T 2-32~43出土土器
第8図 T 2-1~8平面・断面図 (1／80)	第22図 2次調査出土石器 (1)
第9図 T 2-9~16平面・断面図 (1／80)	第23図 2次調査出土石器 (2)
第10図 T 2-17~23平面・断面図 (1／80)	第24図 遺跡範囲図

## 表・図版目次

第1表 繩文土器観察表

第2表 石器観察表



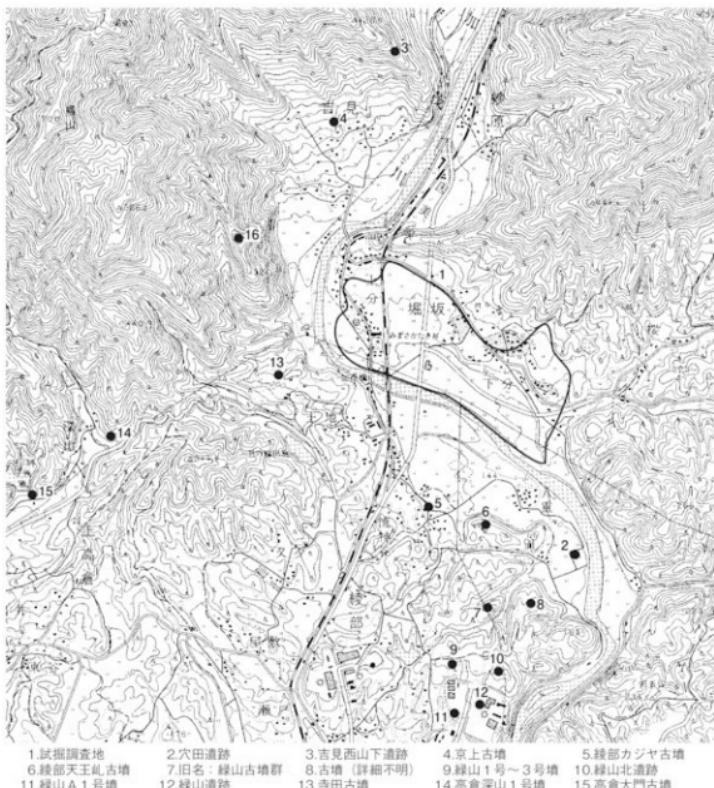
## I 遺跡の位置と周辺の遺跡

調査地となるのは、津山市街地の北東部、堀坂地区である。北から流れてきた加茂川が東へ大きく蛇行する部分で、加茂川の形成する段丘、北側からのびる丘陵及び谷筋からなる。

工事の対象地となる堀坂及び周辺地域には、縄文時代から中世までの遺跡が存在する。加茂川西岸の穴田遺跡では、早期および後期の縄文土器片が出土しているが、遺構はみつかっていない<sup>注1</sup>。

弥生時代になると、穴田遺跡で住居跡や貯蔵穴などがみられ、やや南に下った丘陵上に位置する緑山北遺跡<sup>注2</sup>、緑山遺跡<sup>注3</sup>でも小規模であるが中期の竪穴住居などがみつかっている。上流西岸の山の尾根筋に位置する吉見西山下遺跡では、後期の土壙墓なども確認されている<sup>注4</sup>。

古墳時代には、周辺にも古墳が点在するが、多くは消滅あるいは詳細の不明なものである<sup>注5</sup>。後期の古墳としては、西岸の斜面に横穴式石室をもつ寺田古墳がある<sup>注6</sup>。石室中の陶棺から須恵器や刀などを



第1図 調査地と周辺の遺跡

どが出土している。寺田古墳からひとつ谷を隔てた丘陵の裾部には高倉大門古墳があり、横穴式石室から陶棺、須恵器が出土したが、現在は消滅している<sup>注7</sup>。また、緑山北遺跡、緑山遺跡では、製鉄炉及び炭窯などがみつかっており、この地域で鉄精錬が行われたことが判明している。

中世に入ると、吉見地区の山頂に医王山城が築かれる<sup>注8</sup>。この山城は南北朝期に山名氏と赤松氏の抗争の中で交互に拠守されたが、その後も尼子氏や毛利氏などによる攻防が繰り広げられている。最終的には、16世紀末に毛利氏と羽柴氏との間に和議が成立したことにより開城、廃絶したと考えられている。現在は曲輪や堀切、石垣などが残る。

このように、堀坂地区を除く周辺には遺跡の存在が確認できるものの、工事の対象地区である堀坂地区では遺跡の存在はほとんど知られていないのが現状であるといえよう。

- 注1 今井庵1972「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第一巻 原始・古代』津山市史編纂委員会  
注2 今井庵「津山市鏡部東穴田遺跡」（1961・1962年度分）津山市文化財略報 第2集 津山市教育委員会  
注3 行田裕美・平岡正宏1994「緑山北遺跡」（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第53集）津山市教育委員会  
注4 中山俊紀1986「緑山遺跡」（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集）津山市教育委員会  
注5 平岡正宏1999「吉見林道法面採集の土器」『年報 津山弥生の里』第6号 津山市教育委員会  
注6 中山俊紀1986「寺田古墳」（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第22集）津山市教育委員会  
注7 今井庵ほか「津山市高倉大門古墳整理報告」『1960年度 津山市文化財調査報告』第1集 津山市教育委員会  
注8 新人物往来社1980「日本城郭大系」第13巻（広島・岡山）

## II. 調査経過

### 1. 調査に至る経過

平成 13 年度から 17 年度にかけて県営は場整備事業（担い手育成型）堀坂地区（平成 15 年度から經營体育基盤整備事業 堀坂地区）が実施されることとなり、津市教育委員会と、事業者である岡山県津山地方振興局との間で、対象地区における文化財の取り扱いについての協議を行った。当該地区においては、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなく、これまで分布調査等も実施されていなかったため、遺跡の有無、状況等を明らかにするための分布調査を事前に行った。その結果、対象地区のほぼ全域にわたって遺物の散布が確認され、工事に先立ち試掘調査を行うことになった。調査は国庫補助を受けて 2 ヶ年度（平成 12 年度、13 年度）に分けて実施した。

### 2. 調査経過

は場整備の対象となったのは津山市堀坂地内で、加茂川と北側の丘陵に挟まれた部分約 39.5ha である。現状では水田及び畑地として利用されている。試掘調査は平成 12 年度（1 次調査）、13 年度（2 次調査）の 2 ヶ年度にわたり実施した。調査は、遺物の散布が特に顕著であった部分を中心にトレント（試掘溝）を設定して行った。

1 次調査は平成 12 年 10 月 11 日から 12 月 21 日までである。調査区は、加茂川と JR 因美線に挟まれた川沿い及び段丘部分、山裾の丘陵、は場整備の対象地区的東端に位置する丘陵と、大きく 3 つの部分からなる。調査は、西側部分から着手し、順次遺構検出・精査・埋め戻しの作業を進めていった。12 月 21 日には最後のトレントを埋め戻し、すべての作業を終了した。調査したトレントは合計 23 本であり、調査面積は合計約 240 m<sup>2</sup>である。

2 次調査は、は場整備対象地区的うち、前年度に調査を終えた部分以外について平成 13 年 10 月 23 日から平成 14 年 1 月 31 日まで実施した。調査区は、南北方向の県道と JR 因美線に挟まれた部分、加茂川に平行する微高地とその北側の低位部、及び丘陵裾部と大きく 4 つの地区に分けられる。調査は、調査地の西側から東に向けて順次トレントを設定し、作業を進めていった。調査したトレントは合計 44 本であり、調査面積は合計約 470 m<sup>2</sup>である。

### 3. 調査体制

発掘調査は津市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下のとおりである。

津市教育委員会 教育長	松尾康義
教育次長	森元弘之（～H 15. 3. 31）
	谷口 智（H 15. 4. 1～）
文化課長	内藤正剛（～H 14. 3. 31）
	近藤恭介（H 14. 4. 1～）
文化財センター 所長	中山俊紀
次長	安川豊史（調査担当）
主事	豊島雪絵（調査担当）

整理作業は野上恭子、岩本えり子、家元弘子が担当した。

発掘作業は社団法人シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である（敬称略）。

尾島登、岸部秀郷、佐藤陽一、曾根春雄、竹花納、谷原知治

発掘調査及び報告書作成の過程において、文化財センター職員及び下記の方々の指導、助言、協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます（敬称略）。

芦田節子、芦田仙一、安達正美、安東治、安東喬、安藤享、安藤巻夫、安藤正弘、井上和正、内田和義、内田満子、兼田延昭、兼田佳子、岸本稟實、岸本彰三、岸本富枝、岸本義夫、北川富子、北川文夫、小島一三、小島道能、左子謙二、左子達美、左子光子、左子允也、稻田孝、曾根植夫、曾根昌子、田口喜一、田口春義、田口博夫、田口義隆、谷原武士、谷原知治、谷原稔、谷原幸雄、仲井始、仲井泰、西川宏、二又國光、二又治男、藤井篤志、藤井猛、藤井泰士、藤田尚徳、本郷正、本郷久一、本郷弘子、本郷房太郎、本郷正行、本郷都、本田政子、本郷泰、本郷良行、山本光良、吉永清、吉永茂（以上地権者）伊藤晃、岡本寛久、大橋雅也、亀山行雄、河合忍、小嶋善邦、平井泰男、光永真一

### III 発掘調査の概要

#### 1. 1次調査の概要

##### T 1-1～3（第3図）

加茂川東岸の高位段丘部分である。いずれのトレーナーにおいても淡褐色あるいは灰褐色の床土の下に薄い黄褐色土層があり、その下は黒ボク層が堆積している。黒ボク層は各トレーナーで0.2～0.4mみられ、さらに下へ続いている。遺物はT 1-1の床土層（2、3層）から土錐、勝間田焼片が、T 1-3の黒ボク層直上の4層からは土師器片、勝間田焼片などが出土した。また、T 1-2には、明確な造構ではないが黒ボク層の直上で浅い不整形の落ち込みがあり、その中から弥生土器片が出土した（第7図7）。

##### T 1-4（第3図）

南流してきた加茂川が東へ大きくカーブする地点に形成された低位段丘上に位置するトレーナーである。ここでは黒褐色土層（4層）の上面において柱穴と思われるビットが数個検出された。埋土は灰褐色土で内部からは土師器片が2、3点出土した。時期は不明だが、埋土の状況からは古代以降のものと考えられる。また、4層中からは土錐（第7図20）が出土した。

##### T 1-5～8（第3図）

加茂川の形成する自然堤防部分に位置する。この地点はいずれも氾濫原であり、地表面から0.6～0.8m掘削した時点で砂地となる。特に川沿いに設定したT 1-7・8には、大きめの川原石がみられた。造構はT 1-8から溝状の浅い落ち込みがみられたが、造構であるかは不明確である。そのほか、トレーナー東端でビットを1個検出し、土師器片1点が出土した。また、遺物包含層である5層からは、古代の土師器脚台部が出土した（第7図16）。T 1-5～7については造構は全く検出されず、遺物は古代以降の土師器片、勝間田焼、近世の擂鉢片などが出土したが、いずれも流れてきたものと思われる。

##### T 1-9（第4図）

加茂川の北側に位置する丘陵である。この地点では耕土の下に薄い黒褐色土を挟んで地山（黄褐色土層）に達する。深さは0.2m前後と非常に浅い。浅い土坑数個のほか、調査区北東部で落ち込みを検出した。遺物はビットから出土した土師器数点のみである。

##### T 1-10～12（第4図）

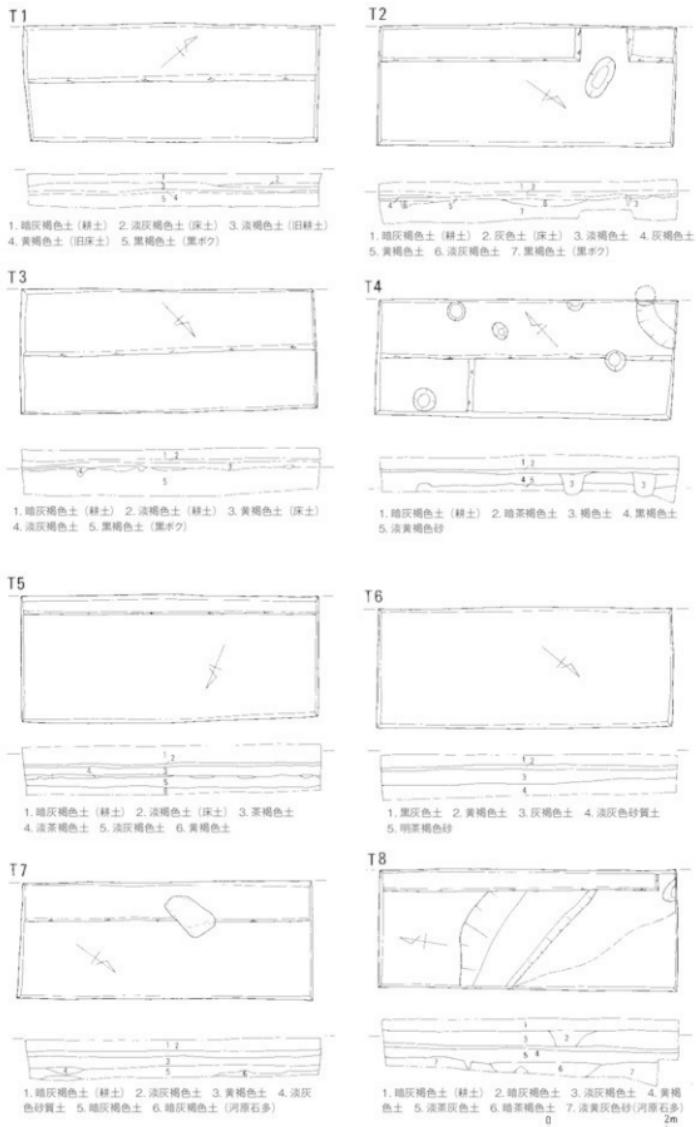
T 1-1～3のある高位段丘部分である。T 1-1～3と同様、床土、黄褐色土層、黒ボク層と続く。T 1-11でビットを検出しているが、遺物ではなく、造構ではない可能性が高い。その他のトレーナーにおいても、造構は検出されなかつた。遺物は黒ボク層直上からのものが多く、T 1-10では、黒ボク層直上で検出されたビットから土師皿が出土した（第7図18）。また、T 1-11、12でも同様に黒ボク層の直上から土師器、須恵器片が出土した。

##### T 1-13（第4図）

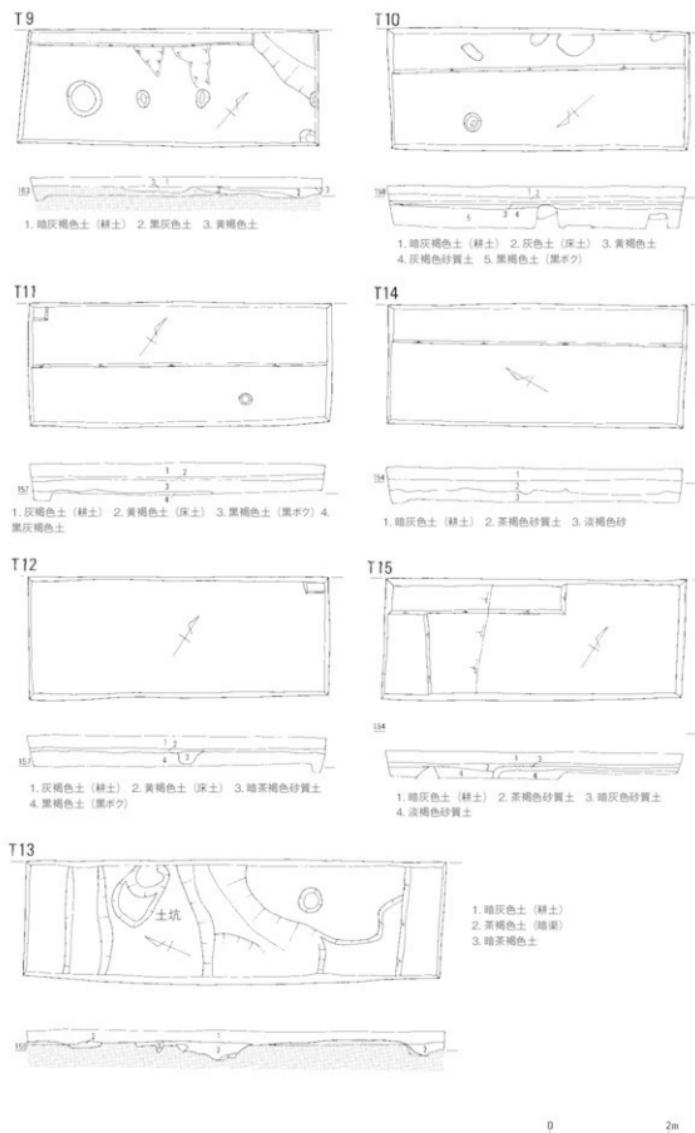
T 1-4の北側に位置する。0.2mほどの耕土を除去するとすぐに地山を検出したことから、T 1-4の状況に照らし合わせると地山が北側に向かって高くなることが判明した。また、調査区北端部で土坑を検出したため、トレーナーを2m北へ拡張した。その結果、土坑は楕円形であることが判明したが、遺物は出土しなかつた。その他の溝は近年の水田の暗渠と思われる。遺物は土師皿などがある（第7図19）。

##### T 1-14・15（第4図）

T 1-5～8と同様の自然堤防部分に位置し、ここでも加茂川の氾濫原のあり方を呈している。いずれのトレーナー



第3図 T 1-1~8平面・断面図 (1 / 80)



第4図 T 1-9~15 平面・断面図 (1/80)

においても、耕土の直下から砂質の土が検出され、遺構・遺物はみられなかった。

#### T 1-16 (第5図)

T 1-9に東接する縁である。T 1-9同様、地表面から0.2mほどのところで地山面に達する。遺構は浅い溝、土坑などが検出され、土器片小片が出土した。

T 1-17～23は、北側の山から舌状にのびる丘陵上に設定した7本のトレンチである。

#### T 1-17 (第5図)

耕土の下は黄褐色土（2層）、淡灰褐色土（3層）と続き、その下に遺物包含層である黒褐色土層（4層）が続く。4層の上面には焼上面がみられた。4層を掘り下げる段階で柱穴や浅い土坑などを検出した。遺物は3層から須恵器・土師器片、4層からは縄文土器片、弥生土器片、石庖丁1点、サヌカトの剥片1点が出土した（第7図1、2、4、5、12、14、15、21）。石包丁（同21）は片岩製で、成形時の剥離面を残すが全面を研磨し、一端を欠失する。遺構の広さを確認するため、北側に拡張区を設定し、ここでも柱穴、土坑などを検出したが、住居跡などの遺構にはならなかつた。

#### T 1-18 (第5図)

T 1-17の西隣に位置する。T 1-17同様、遺物包含層（4層）がみられた。掘り下げ段階でビット、浅い土坑を検出した。トレント隣で溝を検出したため、この部分を西側に2m拡張した。遺物は床土層から4層にかけて弥生土器片が、溝からは底部片が出土した（第7図8、9、11、13）。

#### T 1-19 (第5図)

T 1-18の南側に位置する。耕土の直下は地山であり、削平を受けているものと思われる。遺構、遺物などは全く検出されなかつた。

#### T 1-20 (第5図)

T 1-17の南側に位置する。地山面で柱穴などの遺構を検出した。遺物包含層である3層から縄文土器小片や弥生土器片が出土した（第7図3、6、10）。

#### T 1-21 (第5図)

T 1-19同様、耕土直下で地山が検出され、遺構・遺物などは全くみられなかつた。

#### T 1-22 (第6図)

黄褐色土（2層）の下は地山である。遺構は南北方向の溝を1本検出し、弥生土器片が出土した。

#### T 1-23 (第6図)

丘陵の先端部に位置する。造成土（2層）の下で柱穴を数個検出した。また、トレント南東隅では風倒木などもみられた。遺物は2層から須恵器片が数点、サヌカトの剥片が1点出土した。

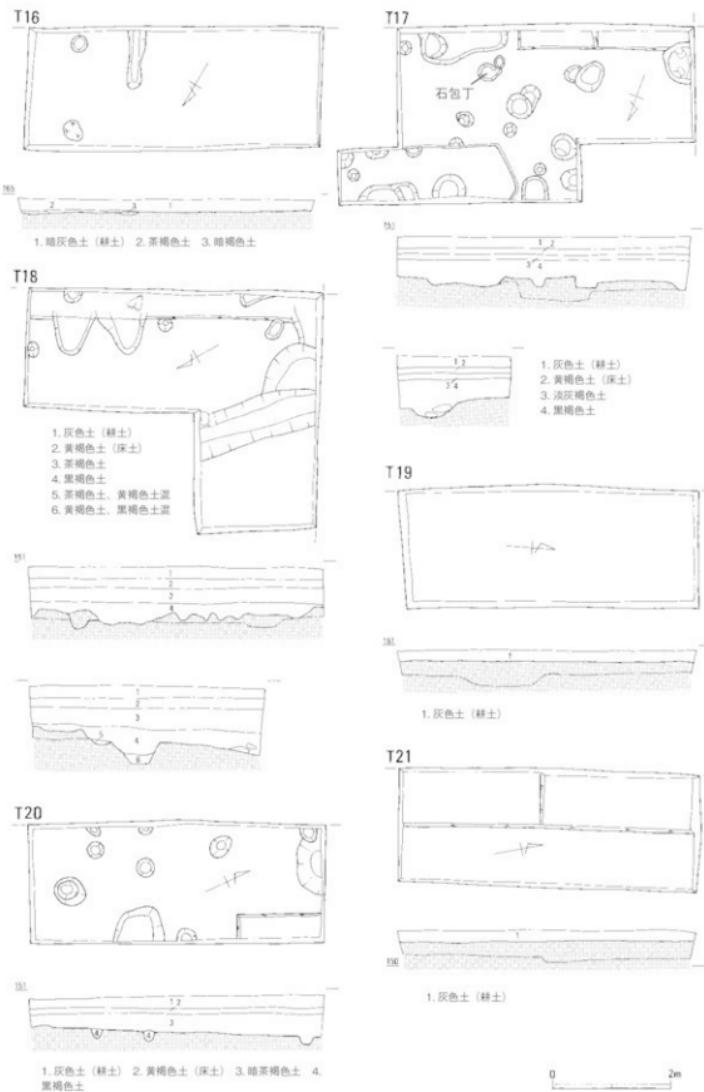
## 2. 2次調査の概要

#### T 2-1～5 (第8図)

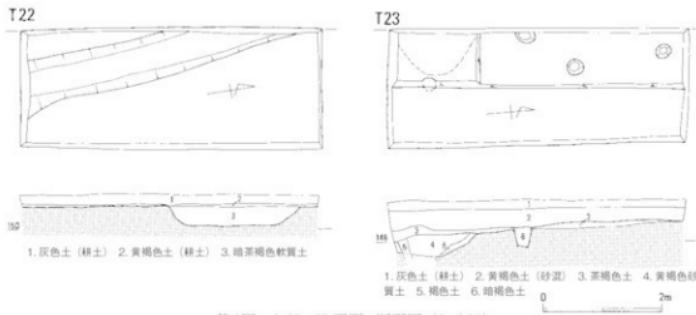
県道とJR因美線に挟まれた調査区の北部に位置する。いずれのトレントにおいても最下層に黒ボク層がみられる。この状況は、JR因美線を挟んで隣接する1次調査の地区と同様である。遺構は検出されず、遺物も少量の土器片である。

2-6～10は、県道と因美線に挟まれた調査区の中心部に位置するトレントである。

III 発掘調査の概要



第5図 1-16～21 平面・断面図 (1／80)



第6図 1-22・23 平面・断面図 (1 / 80)

#### T 2-6 (第8図)

淡灰褐色土層(2b層)で、直径20～30cm程度のピットを4つ検出した。このうち1つのピットの底に根石と思われる平らな石がみられた(柱穴1)。遺物は柱穴1その他2個の柱穴内から中世土器及び土師器の小片が出土した。図示したのは柱穴1から出土した勝間田焼の椀底部である(第14図18)。

#### T 2-7 (第8図)

1層～4層は水田層であり、その下に暗茶褐色土層(5層)がみられる。遺構はなく、遺物は上層から須恵器の小片が、5層から勝間田焼片が出土したのみである(第14図17・19)。

#### T 2-8 (第8図)

床土(2層)の直下で黒ボク層がみられる。遺構はなく、遺物は黒ボク層中から縄文土器小片(第14図1,2)や土師器片が数点出土したのみである。1,2はともに鉢の口縁部で、1は口縁端部に縄文及び四線文を施す。2は脇部にかけてやや屈曲するもので、外面に四線文を施している。いずれも縄文時代後期のものと考えられる。

#### T 2-9 (第9図)

T8同様、床土の直下に黒ボク層がみられる。遺構はなく、遺物も上層からのものである。

#### 2-10 (第9図)

床土の下に淡茶褐色土層、淡灰褐色土層が堆積している。遺構・遺物は全くみられなかった。

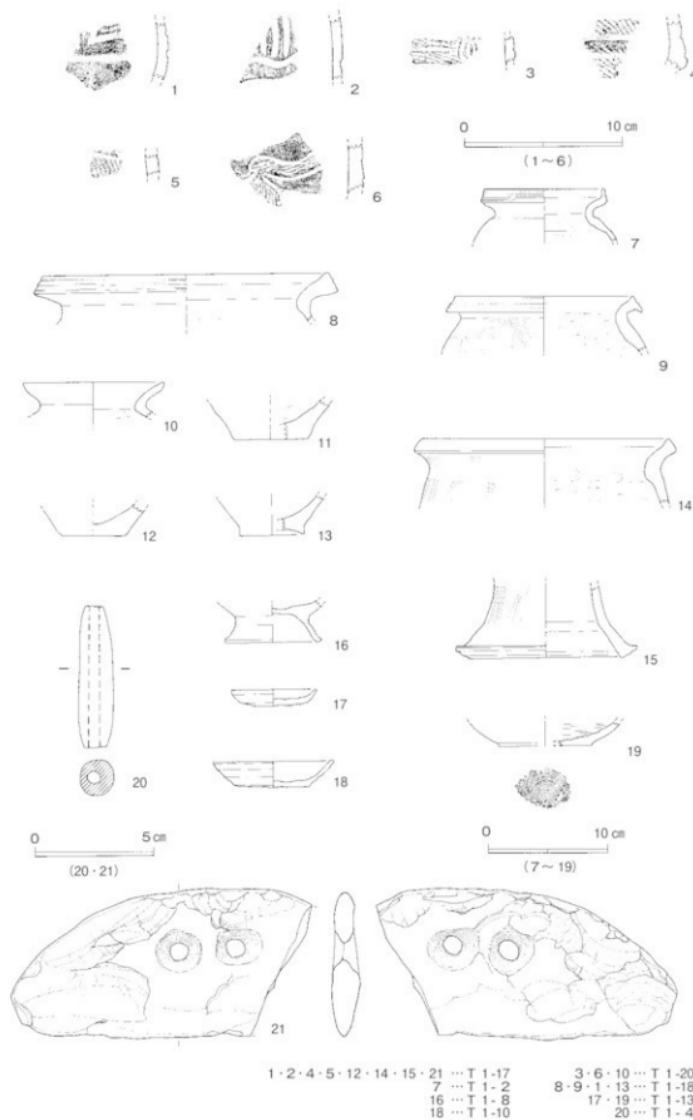
T 2-11～13は、T 1～10と同地区で、加茂川に近接するトレーナーである。

#### T 2-11 (第9図)

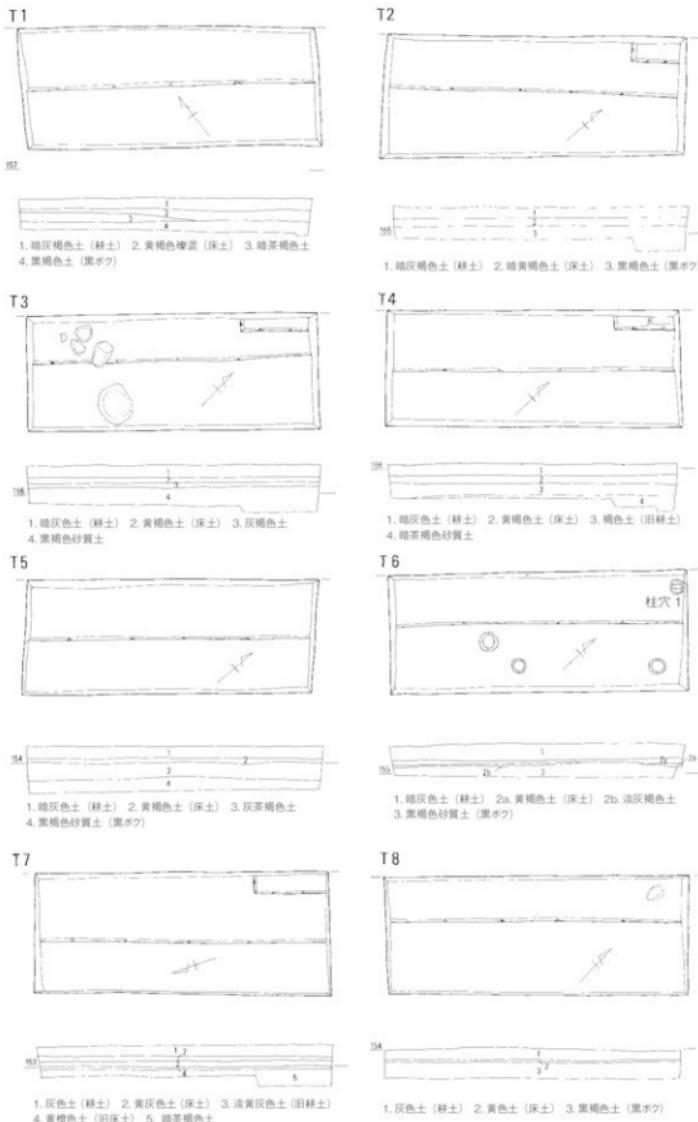
水田層(1～3層)の下に暗褐色土層(4層)があり、その下は薄い黄褐色土層(5層)である。この面で複数の柱穴、土坑を検出した。深さはいずれも0.1～0.2mである。柱穴は同一の建物になると推定できるものもあるが、不明確である。遺物は柱穴、土坑からそれぞれ土師器小片が出土した。また、2層からは須恵器瓶の把手部分及び勝間田焼の椀底部が出土した(第14図15、19)。

#### 2-12 (第9図)

加茂川に近接した部分に設定したトレーナーである。水田層(1・2層)以下は砂や河原石の多い層で、河岸の様相を呈している。基盤層と思われる黄褐色砂質土層を検出し、土器片が数点出土したが、遺構はみつかなかつた。

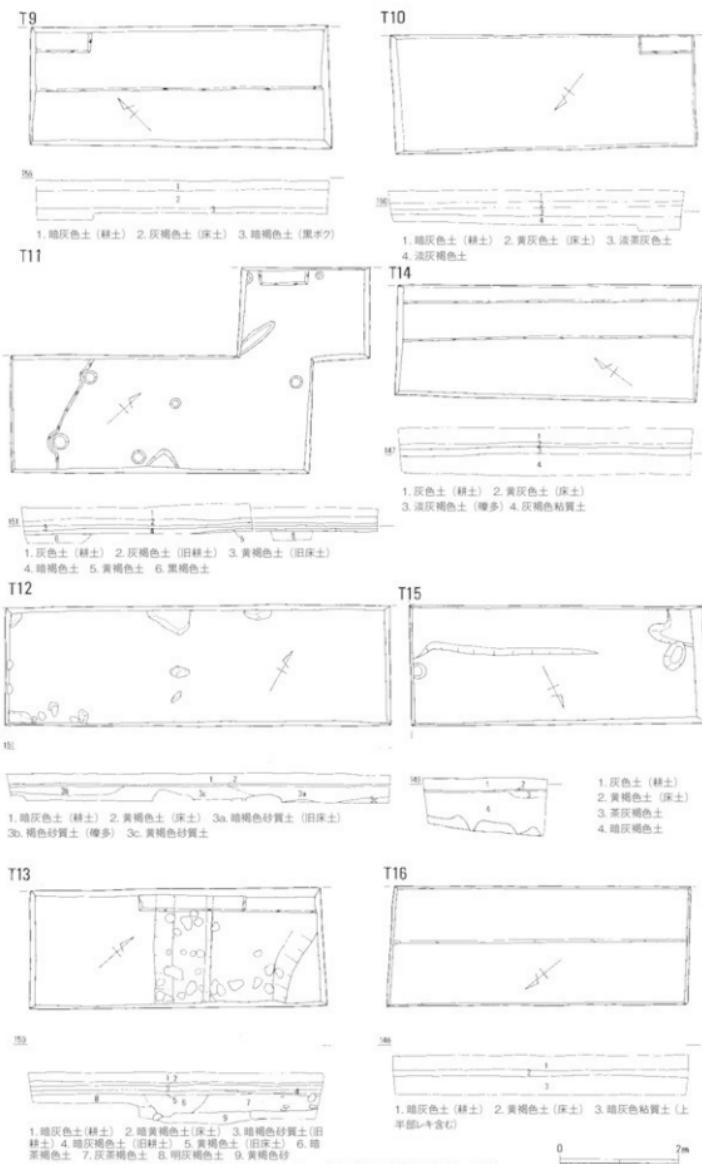


第7図 1次調査出土遺物



第8図 2-1~8平面・断面図 (1/80)

### III 発掘調査の概要



第9図 T 2-9~16 平面・断面図 (1/80)

### T 2-13（第9図）

T 2-12 同様、川沿いのトレチである。水田層（1～5層）の下で幅2m、深さ0.2～0.3mの溝を検出した。埋土は河原石を多く含んだ暗茶褐色土（6層）であり、中から縄文土器片が出土した。溝の底部にも河原石が多く堆積している。また、溝に切られる落ち込み（7層）からも縄文土器片が出土した。基盤層は T 2-12 同様黄褐色砂質土層である。出土遺物の中で図示できたのは溝及び落ち込みから出土した縄文土器である（第14図3～8）。3～6は口縁に突帯を有し、端部に刻みをつけるものである。7は無文の鉢、8は胴部から屈曲して外反する口縁部である。これらの土器はすべて晩期に位置づけられるものである。7層からサスカイトの剥片2点が出土している。

T 2-14～20は、北側の丘陵と加茂川沿いの段丘部の間の低位部に位置する。

### T 2-14（第9図）

低位部に設定したトレチである。床土（2層）の下は疊を多く含んだ淡灰褐色土層、灰褐色粘質土層と続く。遺構・遺物は全くみられなかった。

### T 2-15（第9図）

北側からのびる丘陵から少し下ったところに位置するトレチである。床土（2層）より下層は茶灰褐色土及び暗灰褐色土の遺物包含層（3、4層）が北側で0.4m、南側で0.7m堆積しており、黄褐色砂質の基盤層に達する。明確な遺構はみられないが、包含層からは土師器の碗、須恵器の蓋、杯など、古代のものと思われる土器が多数出土した（第14図9～14）。

### T 2-16～20（第9、10図）

2-14同様、低位部に位置するトレチである。水田層（2層）の下はいずれも無遺物層であり、地表から0.5～0.7m掘削しても全く変化がないため、遺跡は存在しないと考えられる。遺物は T 2-19 で須恵器片が1点出土した他は全くみられなかった。

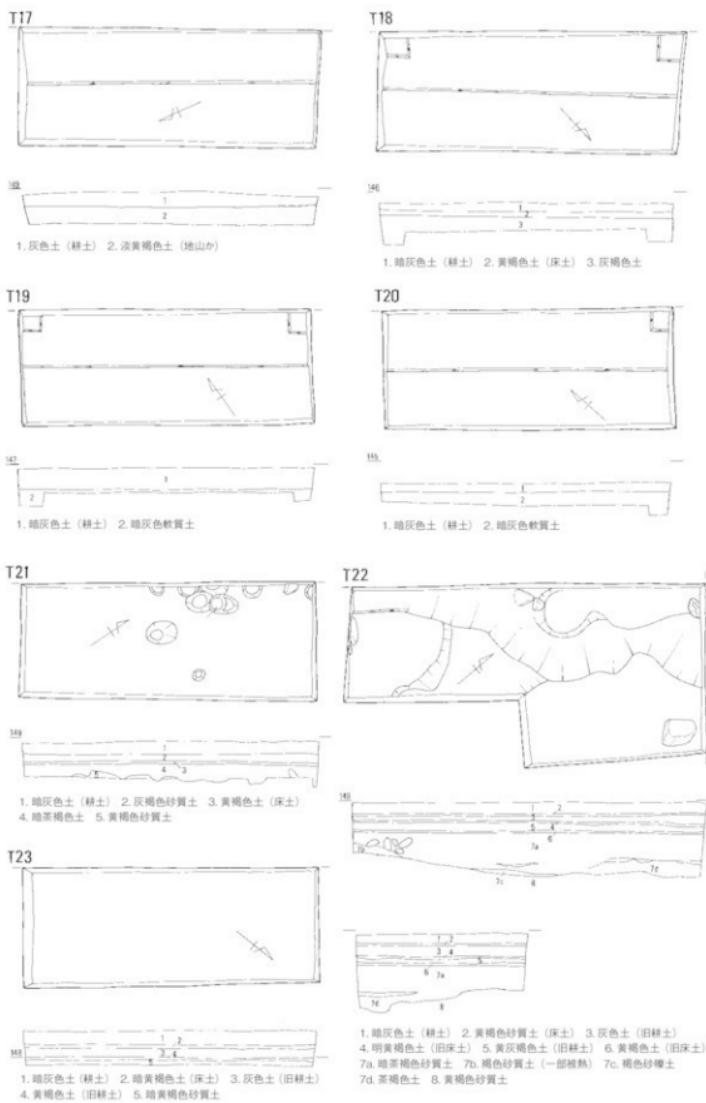
T 2-21～28は、加茂川に沿った東西方向に長い調査区である。

### T 2-21（第10図）

水田層（1～3層）の下の暗褐色砂質土層（4層）が遺物包含層であり、0.2～0.3m堆積している。遺物は各層から出土したが（第15図1、3～5、8～15）、特に4層において顕著であり、縄文土器がボリ袋に1袋程度及び石器などがある。その下には2-12、13と同様の基盤層と思われる黄褐色砂質土層がみられ、数個のビットを検出した。ビット内からも縄文土器片が出土した。縄文土器は口縁端部に縄文を施す後期後葉のものや（同1、4）、突帯文やヘラ描の線刻を施す晩期のもの（同11、12、14、15）などがある。出土した石器の内訳は、サスカイト片4点、同剥片1点、花崗岩（第22図1）とピン岩製（同2）の叩き石各1点、緑色片岩製打製石斧1点（同3）である。

### T 2-22（第10図）

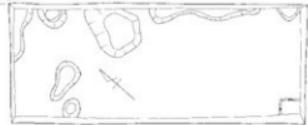
T 2-13と近接していることから、縄文時代の遺跡の存在が推測された。1～6層は水田層であり、その下が遺物包含層（7層）である。包含層は浅いところでも0.4m、最も深いところで0.8m堆積している。包含層からは縄文時代の遺物が多数出土した。包含層は砂質であり、一部に砂礫層が薄く堆積している部分がみられる。最下層は黄褐色砂質土（8層）で、T 2-21と同様の基盤層である。基盤層まで検出すると、南西から北東に下がる深い流路状の落ち込みとなった。流路は一部南方向にも枝分かれしている。包含層からの出土遺物は縄文



第10図 T 2-17～23 平面・断面図 (1/80)



T24

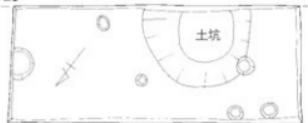


13



1. 暗灰色土（耕土） 2. 灰褐色土（旧耕土） 3a. 暗黄褐色（旧床土）  
3b. 暗茶褐色土 4. 黄褐色砂质土

T26



14



1. 暗灰色土（耕土） 2. 黄褐色土（床土） 3. 灰褐色土（旧耕土）  
4. 黄褐色土（旧床土） 5a. 淡茶褐色砂质土 5b. 黄茶褐色砂质土  
c. 茶褐色砂质土 6. 黑褐色土

T25



15

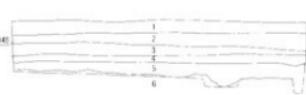


1. 暗灰色土（耕土） 2. 灰褐色土（旧耕土） 3. 黄褐色土（旧床土）  
4. 暗茶褐色土 5. 黄褐色砂质土

T27



16



1. 暗灰色土（耕土） 2. 黄灰褐色土（床土） 3. 黄褐色土（旧耕土）  
4. 黄褐色土（旧床土） 5. 暗茶褐色土 6. 茶褐色砂质土

T28



17



1. 灰色土（耕土） 2. 黄褐色土（床土） 3. 淡灰褐色土（旧耕土）  
4. 淡黄褐色土（旧床土） 5. 淡茶茶褐色砂砾 6. 茶褐色土

T29



18



1. 暗灰色土（耕土） 2. 黄褐色土（床土） 3. 暗茶褐色土

T30



19



1. 灰色土（耕土） 2. 黄褐色土（床土） 3. 褐色土  
4. 灰褐色角砾

T31



20



1. 暗灰色土（耕土） 2. 黄褐色土（床土）  
3. 黑褐色土 4. 黄褐色角砾

0 2m

第 11 図 T 2-24 ~ 31 平面・断面図 (1 / 80)

III 発掘調査の概要

T32

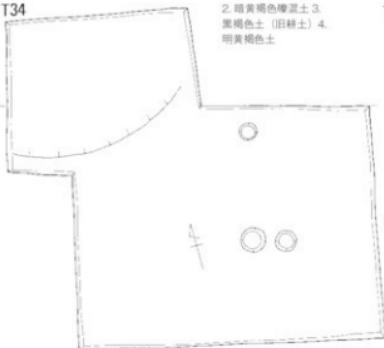


134



1. 暗灰色土（耕土）
2. 粘黄褐色混泥土
3. 黑褐色土（旧耕土）
4. 明黄褐色土

T34



T36

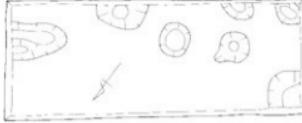


134



1. 暗灰色土（耕土）
2. 黑褐色・黄褐色土（造成土か？）

T38



135



1. 暗灰色土（耕土）
2. 反青褐色土（床土）
3. 灰色土（旧耕土）
4. 黄褐色土（旧床土）
5. 暗茶褐色土

T33



134



1. 暗灰色土（耕土）
2. 黄褐色土（床土）
3. 茶褐色土（旧耕土）
4. 黑褐色土

T35



134



1. 暗灰色土（耕土）
2. 明黄褐色土

T37

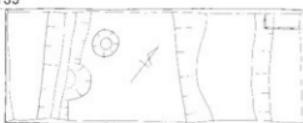


134



1. 暗灰色土（耕土）
2. 赤黄褐色土（造成土）
3. 灰褐色土（旧耕土）
4. 明赤黄褐色土

T39



135



1. 暗灰色土（耕土）
2. 黄褐色土（床土）
3. 灰褐色土（旧耕土）
4. 黄褐色土（旧床土）
5. 黑褐色土
- 6a. 明茶褐色土

0 2m

第12図 T 2-32～39 平面・断面図 (1／80)

土器、石鎚や石匙などの石器やサスカイトの剥片などがあり、特に層の最下部での出土が目立った。

出土した縄文土器はコンテナ2箱分である（第16～第19図）。第16、17図は外面に文様をもつもの、第18図は無文のものである。文様をもつものからみていく。

第16図は深鉢で、口縁部に縄文とヘラ搔の刺突文を施す。同2～27はすべて外面に凹線が施されるものである。凹線はヘラによるものと卷貝によるものがある。4～9は口縁端部内面に1条の凹線を、2、3は凹線と刻みを施している。14、15、17～27は、外面のみに凹線のあるもので、卷貝を押圧したものも多い（15、21～25）。16は注口土器である。28、29は晩期の土器である。28は口縁内面をカマボコ状に肥厚させる鉢の口縁部である。29は突帯文のある口縁部である。

第17図も口縁外面に凹線を施すものである。7は外面に卷貝の押圧痕がみられ、内面には凹線及び円形の刺突をつける。胴部は卷貝による条痕が明瞭にみられる。9は深鉢で、やや内傾する口縁に、卷貝による凹線を施している。凹線内の条痕はナデによって消されている。10は浅鉢になると思われる。9同様、口縁部に卷貝による凹線を施す。凹線内は条痕が明瞭に残る。11は9、10と比べてやや粗雑な作りで、胴部は卷貝による条痕をそのまま残す。

第18図は、外面が無文のものである。外面は、卷貝による条痕やナデによる調整がなされ、内面には凹線のあるもの（1～5、13）もみられる。第19図は底部である。

T 2-22の包含層中から出土したこれらの遺物は、一部晩期のものもみられるが、ほとんどが縄文時代後期後葉に位置づけられるものである。出土した石器は、サスカイト製石鎚7点（第22図4～10）、同石匙1点（同11）、頁岩製叩き石1点（同12）、サスカイトの石核なし残核8点（同13-16）剥片28点（同17）、同碎片42点である。

#### T 2-23・24（第10、11図）

旧水田層の下は黄褐色砂質土であり、T 2-22と同様の基盤層が検出されたが、木の根などの攪乱があるのみで、遺構は存在しなかった。遺物は土師器・勝間田焼の小片の他にT 2-24からサスカイト剥片2点が出土した。

#### T 2-25（第11図）

旧水田層の下に暗茶褐色土の遺物包含層があり、この中から縄文土器片やサスカイトが出土した。基盤層は付近のトレンチと同様、黄褐色砂質土である。浅い落ち込みがあるのみで明確な遺構は見つかなかった。縄文土器は肥厚させた口縁端部に縄文を施すものや（第15図2）、磨り消しのもの（同7）などがみられることがから、後期後葉のものと思われる。石器類にはサスカイト剥片2点と同碎片1点がある。

#### T 2-26（第11図）

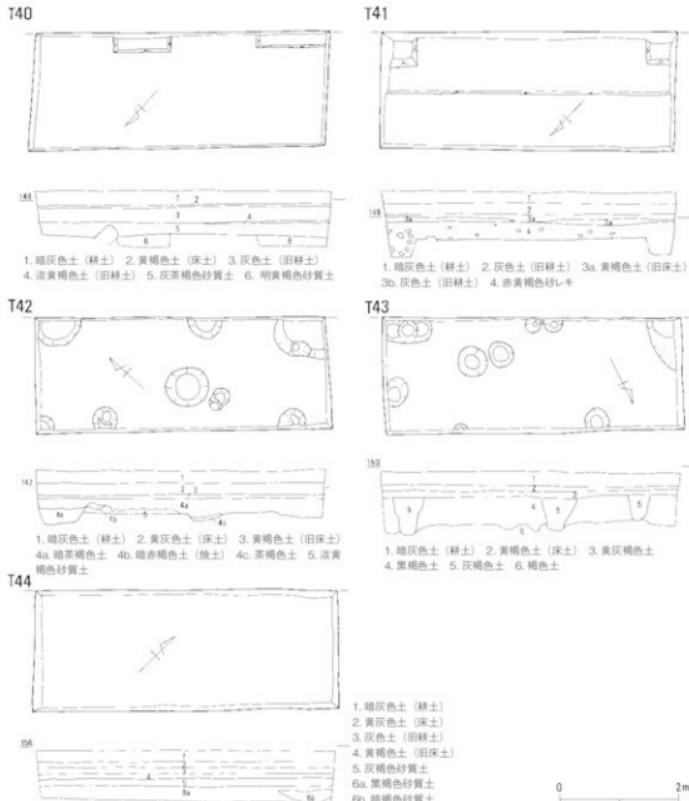
旧水田層の下で遺物包含層がみられ（5層）、多数の土器が出土した（第20図1.5）。さらに黒褐色土層（6層）まで下げたところで、複数の柱穴及び土坑を検出した。土坑は一部トレンチ外に及ぶが、直径約1.8m、深さ約0.7mのもので、埋土中から完形の勝間田焼碗をはじめ中世の土器が多数出土した（同2～4、6～12）。5層上面までの土層からサスカイト剥片2点が、6層上面から片岩製の打製石斧1点（第23図）が出土した。

#### 2-27（第11図）

旧水田層の下に暗茶褐色土（5層）が堆積しており、その下に基盤層と思われる茶褐色砂質土（6層）がみられる。遺構はなく、遺物は上層からの少量の須恵器片のみである。

#### 2-28（第11図）

旧水田層の下は薄い砂礫層であり、その下は茶褐色土（6層）が厚く堆積している。遺構はなく、遺物は上層からの少量の土器片のみである。



第 13 図 2-40 ~ 44 平面・断面図 (1/80)

T 2-29 ~ 37 は、ほ場整備対象地区の北東部に位置する。北側からびる丘陵の谷筋に T 2-29 ~ 33, 37 が、尾根筋には T 2-34 ~ 35, 37 が位置する。

#### T 2-29 ~ 31 (第 11 図)

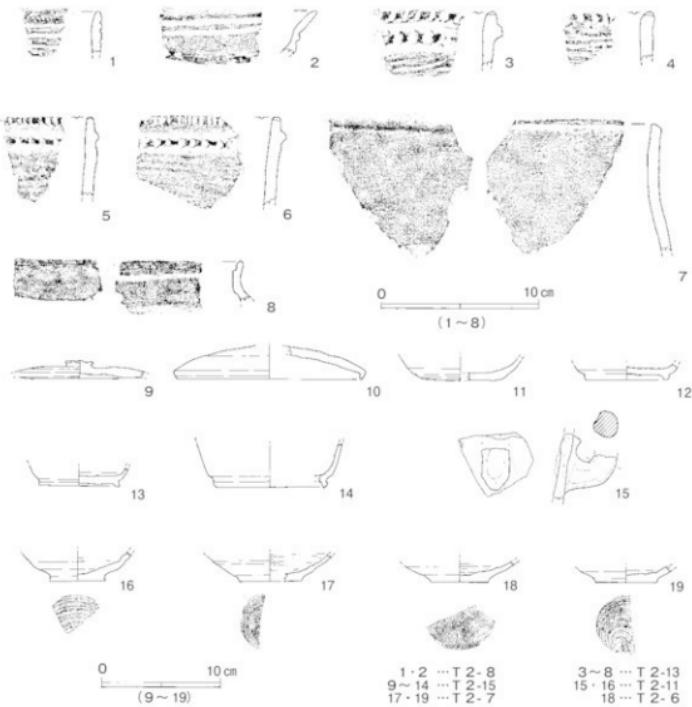
水田層より下層で遺物包含層はみられなかった。2-29 では旧水田層の下に灰茶褐色土層（3 層）が 0.6 m 以上みられる。遺構はなく、遺物は上層からの少量の土器片のみである。

#### T 2-32 (第 12 図)

水田層より下層は擾乱が著しく、遺構はみられなかった。遺物は、擾乱土中から須恵器の蓋など数点の土器片が出土したのみである（第 21 図 12）。

#### T 2-33 (第 12 図)

旧水田層の下に黒褐色土の遺物包含層（4 層）が 0.5 m 以上みられ、以下に続くものと思われるが、湧き水



第14図 T 2-1～15出土土器

のため掘り進めなかつた。遺構は検出されず、遺物は古代から中世の土器片、鉄滓等が出土した。

#### T 2-34（第12図）

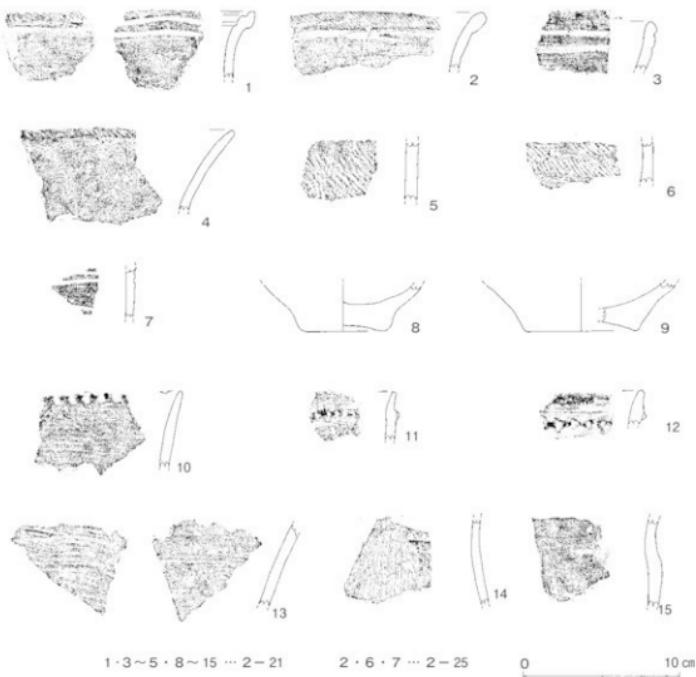
水田の耕作土を除去するとその直下に地山である黄褐色土層に達する。柱穴と思われるビットを2個検出したため、北側に拡張を行ったところ、同規模の柱穴が1個みられた。また、さらに北側で円形の浅い落ち込みを検出しながら、住居址などの明確な遺構にはならなかつた。柱穴からの遺物ではなく、円形の落ち込みから数点の弥生土器片が出土した（第21図9）。

#### T 2-35～37（第12図）

T 2-34 同様、水田層の下で地山を検出した。いずれのトレンチも大きく削平が行われていたと思われ、遺構・遺物は全くみられなかつた。

#### T 2-38（第12図）

T 2-13の北約50mのところに位置するトレンチである。旧水田層の下に厚さ0.5m程度の遺物包含層（5層）がみられた。最下層は周辺のトレンチ同様、基盤層である黄褐色砂質土（7層）である。基盤の凹凸はあるが、明確な遺構はみつかなかつた。遺物は包含層中から縄文土器、土師器甕などが出土した。縄文土器は外面に突帯文をつけ、突帯部分と口縁部に刻みをつけるものがあり（第21図1～3、7）、一部内面に線刻をしている



第15図 2-21・25出土土器

ものもみられる（同5）。また、土師器の甕は器壁が薄いもので、外面はハケ、内面はヘラ削りを行っている。これらの縄文土器はすべて晩期のもので、2-13出土のものと同時期のものと考えられる。

### 2-39（第12図）

2-11 のすぐ南側の水田に設定したトレーンチである。水田層の下層である黒褐色土層（5層）が遺物包含層である。その下層の明茶褐色土（6層）が基盤層になると思われる。基盤では溝状の遺構が2条検出された。ともに南北方向で、東側のものが幅1.5m、深さ0.5m、西側のものは幅0.8m、深さ0.2mである。遺物は、東側の流路内から弥生土器片が数点出土したほか、2つのピット内から出土した時期不明の土師器片などがある。

### 2-40（第13図）

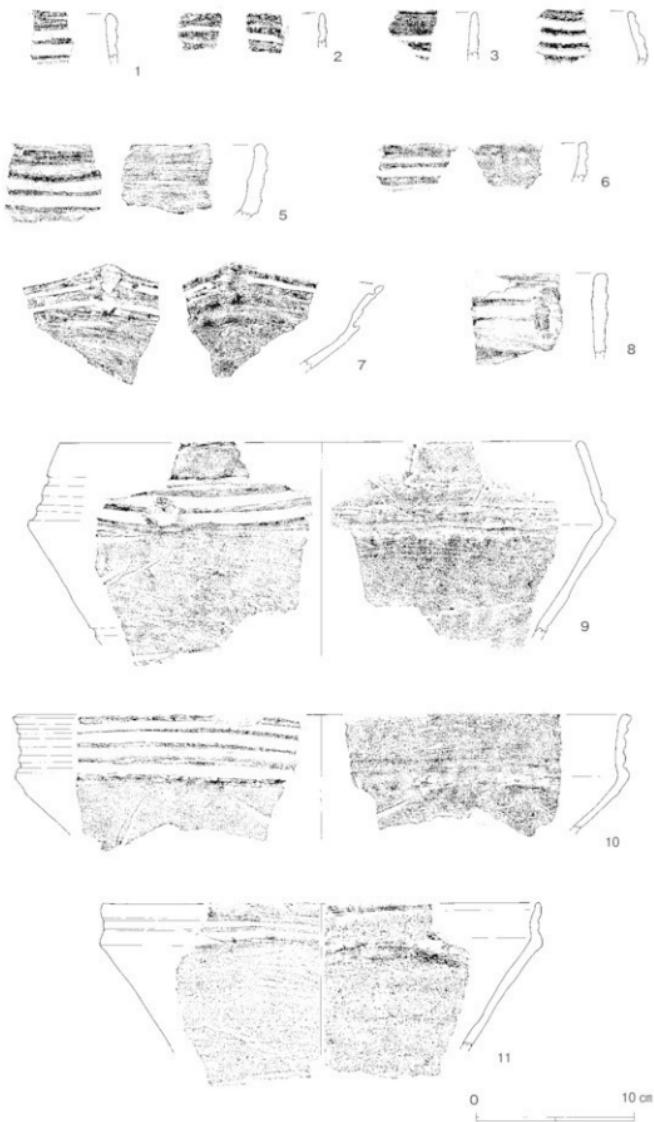
T 2-21 の東隣に位置する。T 2-21で検出した縄文時代の遺物包含層が続くことが推測されたが、旧水田層の下は灰茶褐色砂質土層（5層）、明黄褐色砂質土層（6層）と無遺物層が堆積しており、遺構はみられなかった。遺物も、上層から出土した小片のみである。

### T 2-41（第13図）

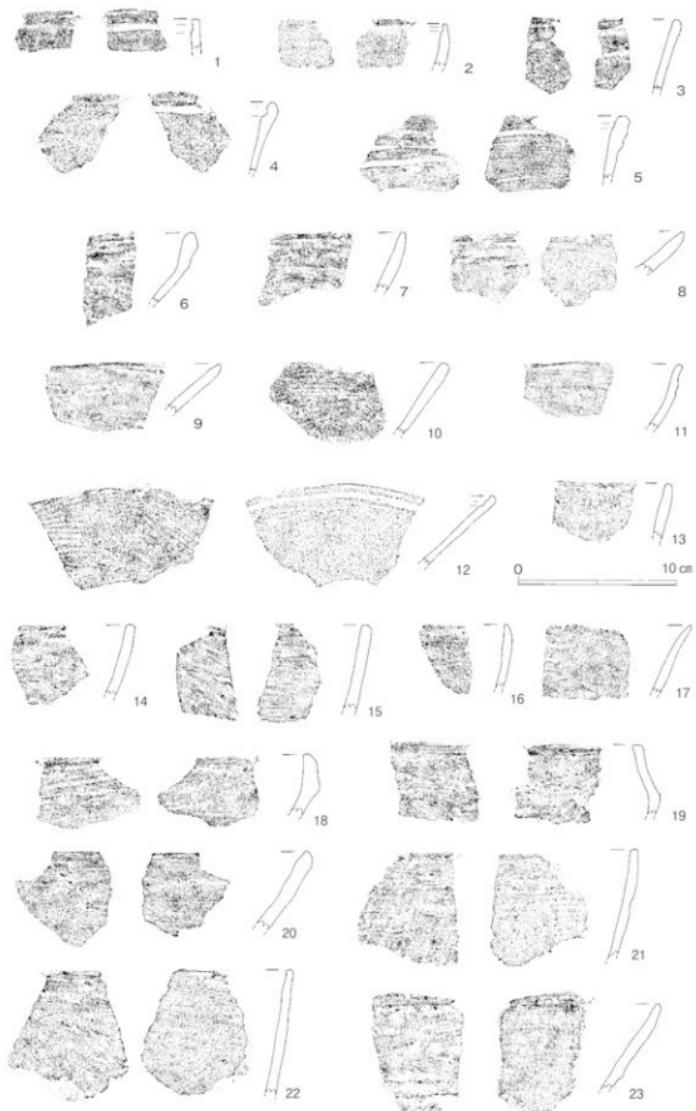
T 2-22 の東隣に位置する。旧水田層の下は河原石を多量に含んだ砂礫層であった。T 2-22でみられたような縄文時代の遺物包含層はなく、遺物は勝間田焼片など、水田層からの少量の土器片のみである（第21図16、17）。



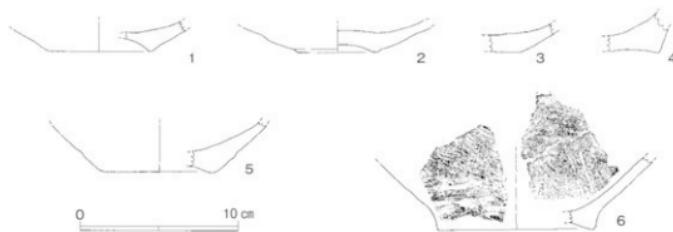
第16図 T 2-22出土土器 (1)



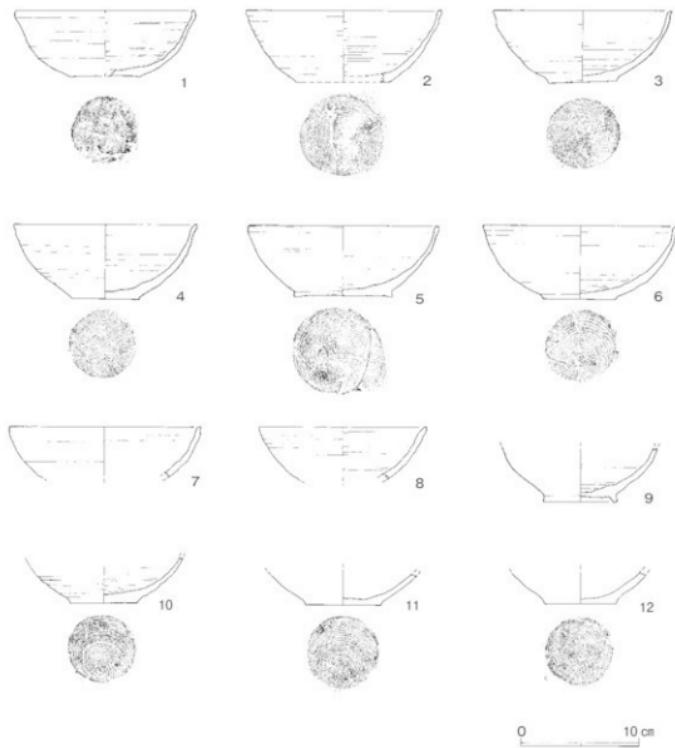
第17図 T 2-22出土土器 (2)



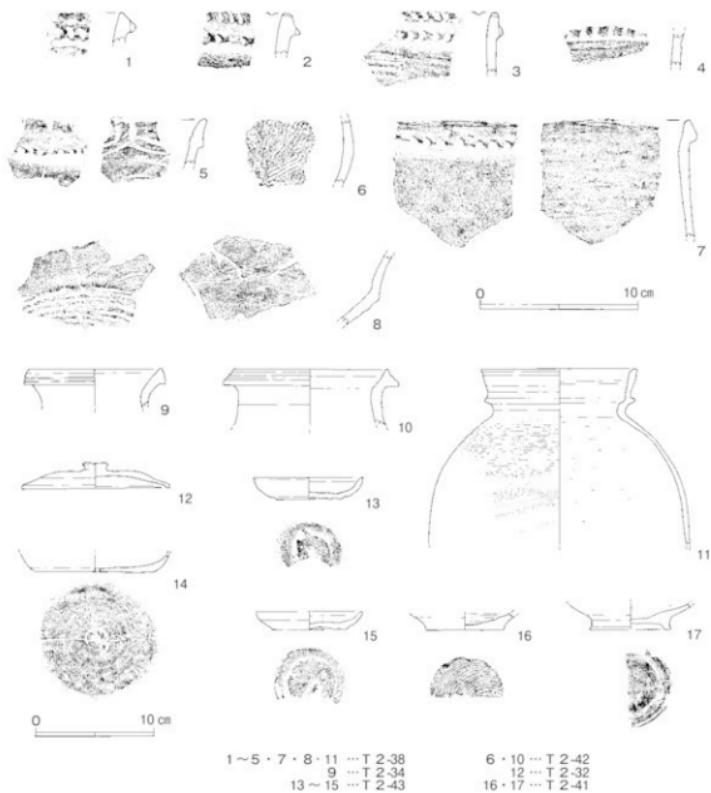
第18図 T 2-22出土器 (3)



第19図 T 2-22出土土器 (4)



第20図 T 2-26出土土器



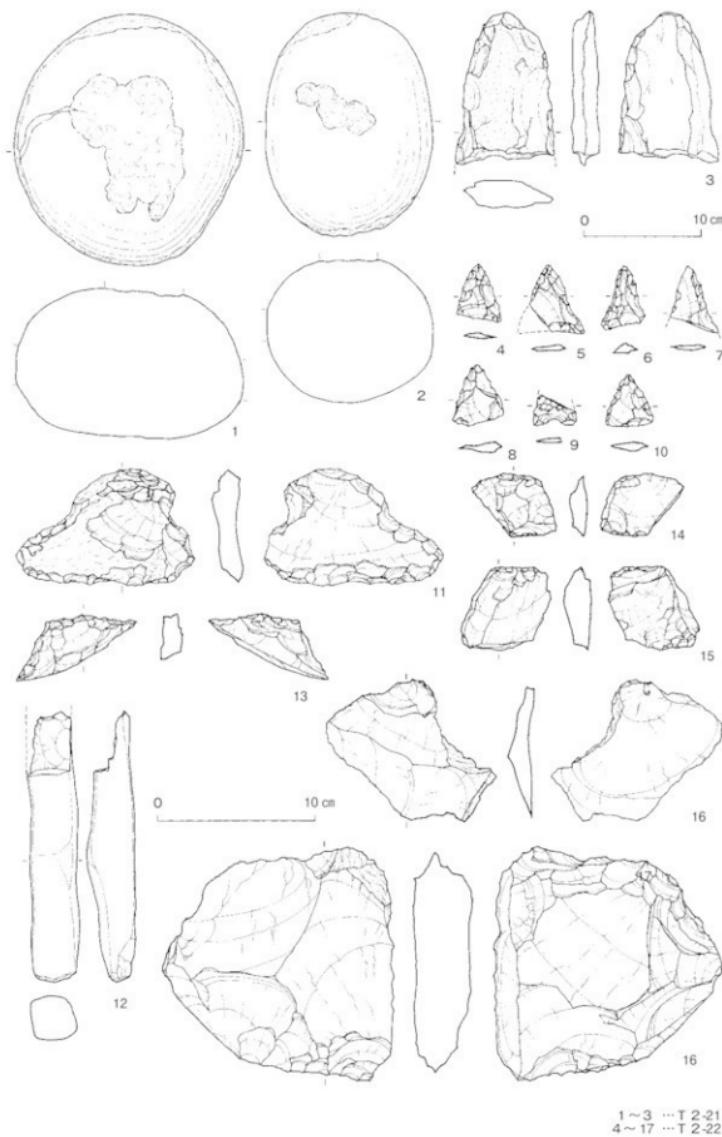
第21図 2-32～43出土土器

#### T 2-42 (第13図)

T 2-25の50m西側に設定したトレーニングである。T 2-25でみられた遺物包含層の有無を確認することを目的とした。その結果、水田層の下に暗茶褐色土の遺物包含層（4層）がみられた。遺物は弥生土器の壺口頭部（第21図10）などがある。また、黄褐色砂質土の基盤層（5層）まで下げたところで、複数の土坑を検出し、中から縄文土器片が出土した。図示できたのはそのうちの1点で、外面には縄文が施されている（同6）。

#### T 2-43 (第13図)

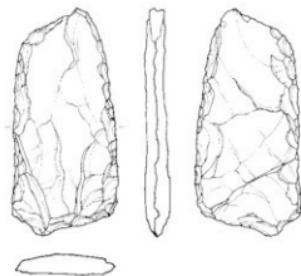
北側の丘陵からやや下ったところ、T 2-15の西隣に位置するトレーニングである。水田層より下層には40～50cmの黒褐色土の遺物包含層（4層）が堆積している。包含層上面まで検出したところ、4つの柱穴を検出した。また包含層の下には基盤層となる褐色土層（6層）がみられ、この面でも複数の柱穴を検出した。遺物は、上層の柱穴からは中世のものと思われる土器片が、下層の柱穴からは古代の土師皿や須恵器片が出土した（第21図13～15）。



第22図 2次調査出土石器（1）

T 2-44（第 13 図）

旧水田層の下に灰褐色砂質土（5層）、黒褐色砂質土（6層）が堆積しており、6層はさらに下へ続く。水田層で少量の土器片が出土したのみで、遺構はみつからなかった。



第 23 図 2次調査出土石器（2）

## IV まとめ

## 1. 遺跡の範囲について

調査地である堀坂地区は、これまで周知の埋蔵文化財包蔵地の希薄な地域であり、詳細な分布調査も行われていない状況であった。今回は場整備は、このような遺跡の有無が不明であった地区において実施されるものであったため、早急に分布調査及び必要な地点における試掘調査を行う必要性があった。2年次にわたって調査したトレンチの数は合計 67 本である。調査の結果判明した遺跡について、西側の調査区からみしていくこととする。なお、遺跡の名称については、大字である堀坂の後に地区の小字名をつけることとした。

T 1・2 及び 10 では、少量ではあるが黒ボク層の直上で弥生土器、土師器がそれぞれ出土している。また、T 1・4 では古代のものと思われる柱穴が検出され、T 1-13 でも遺物の出土がみられることから、狭い範囲ではあるが加茂川東岸の段丘部分に 2 箇所の遺跡が存在することが判明した。この 2 遺跡をそれぞれ堀坂道通遺跡、堀坂橋ノ元遺跡とする。加茂川が大きく東へカーブする地点に設定したトレンチ(T 1・5～7、14・15)からは遺構は存在せず、加茂川の氾濫原であったと考えられる。

県道と JR 因美線に挟まれた調査区では、北側では黒ボク層が堆積しており遺構は検出されなかつたが、T 2・6 において中世の柱穴を検出し、やや南側の T 2-11 でも同様の柱穴があることから、一帯に中世の遺跡の存在が推測される。これらの遺跡を北から堀坂筋分田遺跡、堀坂南ノ前遺跡とする。

東へ流れる加茂川の形成する段丘部分においては、T 2-22 で縄文時代後期の遺物が多数出土し、周辺の T 2-13、21、38 からもピットや落ち込み等を検出したことから、この広がりを堀坂星ヶ坪遺跡とする。ただし、県道を隔てた T 2-13 及び 38 からは、縄文時代晩期の土器が出土していることから、遺跡の様相がやや異なるものである可能性が高い。東側は若干遺跡の空白域があり、T 2-25 及び 42 で再び縄文時代後期の遺構を検出した（堀坂大高下遺跡）。さらに東側の川沿いに位置する T 2-26 では、中世の土器が多数出土した土坑や柱穴等がある。やや北側に設定したトレンチでは同時期の遺構はみられなかつたため、川沿いに中世の遺跡の存在を認めることが出来よう。この地区は堀坂田中遺跡とする。

調査区の最も東に位置する舌状にのびる丘陵一帯には、遺跡の存在が推測される。現況では南に向かうにつれ低くなるが、T 1-17～23 の地山の状況から判断すると、T 1-17、18 のある北側から南に向かって徐々に高くなり、T 1-19 や 21 の部分で最高点に達し、さらに南の T 1-22、23 付近で再び下がるという旧地形が推定できる。遺構や出土遺物から、縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡が広がっていると考えられる。この部分を堀坂宮ノ前遺跡とする。東西方向の県道を隔てた北側部分は全体が河岸よりも低い湿地帯であり、いずれのトレンチにおいても遺跡は確認されなかつたが、T 2-15 や 43 など、北側の丘陵からやや下ったところでは古代の土器を含む包含層が厚く堆積しており、これらのトレンチよりもさらに上方に遺跡が存在していたものと思われる。

北側の丘陵に位置する T 1-9 や 16 では、出土遺物はわずかであるが、浅い土坑などが検出された。遺跡の存在は確認することができたが、時期などの詳細は不明である。この地区を堀坂耕整遺跡とする。

北東部の地区をみると、T 2-29～33 は丘陵の谷筋にあたり、遺跡の立地には適さなかつたものと思われる。これに対し、T 2-34～37 は丘陵の尾根筋にあたり、遺跡の存在が推測されたが、大きく削平を受けていると思われ、遺構は柱穴のみであった。この地区を堀坂庄畠遺跡とする。



第21図 通路範囲図

地図範囲

2年次にわたる試掘調査では、合計10箇所で縄文時代から中世の遺跡を確認することができた。遺跡の立地は、加茂川の形成する段丘部分と、北側の丘陵部分の大きく2つに分けられ、加茂川が東側へ大きく曲がる部分は氾濫原、段丘と北側の丘陵に挟まれた部分は低湿地であり、人々が集落を営む立地には適していなかったと考えられる。

## 2. 出土遺物について

### (1) 縄文時代後期後葉の土器について

T-22では、第7層の遺物包含層から縄文土器が出土した。試掘調査のため限られた範囲内ではあるが、コンテナ2箱分程度出土しており、一定のまとまりをもっている。

T-22出土土器の時期については、9割以上が縄文時代後期後葉、瀬戸内地方の土器編年では、倉敷市福田貝塚発見の土器を指標とする福田KⅢ式のものと捉えることができる。福田KⅢ式は瀬戸内地方の土器型式であるが、併行関係にある型式として、近畿地方では奈良県宮滝遺跡の土器を指標とする宮滝式があげられる。施文の主体は凹線文、貝殻圧痕であり、その併行関係についてはこれまで多くの研究がなされている（泉1979、丹治1980、和田1999）。これらの土器は凹線文系土器として位置づけられるものであり、その特徴として、①口縁部の内面あるいは外面に凹線を数条施文する点、②外面の凹線上に巻貝の押圧痕をつける点などがあげられる。これらの特徴は、岡山市百間川原尾島遺跡、倉敷市舟津原遺跡、同阿津走出遺跡、同広江、浜遺跡出土の後期の土器にもみられる。

まず、①の特徴について出土した土器をみると、凹線は巻貝によって施文された後にナデやミガキによって条痕を消しているものが多く、条痕をそのままの残すものは少ないようである。このことは、胴部片についても言えることである。第17図9の深鉢は凹線内及び胴部の条痕を丁寧に消しており、これに対して同7の浅鉢や同11の深鉢などは条痕をそのまま残すやや粗雑なつくりであるといえよう。

②の巻貝の押圧方法としては、第16図25や第17図9のように、巻貝を押し当てた後に若干扇状に動かして施文するものと、第16図15、22、24や第17図8のように、巻貝を動かさず單に押し当てるだけのものの2者がみられる。この2つの圧痕について和田は、前者を「押圧擦過」、後者を「押圧」としており<sup>注1</sup>、押圧擦過は宮滝式の施文手法の基本をなすものととらえ、押圧は宮滝式の前段階である元住吉山II式に系譜をもつものとする。この前後関係については、丹治康明も述べている。丹治は、凹線文土器をI期、II期に分類した上で、宮滝式土器をII期に位置づけ、I期の特徴の一つとして「腹縁圧痕」（巻貝の腹縁部を單に押し当てるもの）をあげ、II期になると「扇状圧痕」が盛用されるものとしている。しかし今回出土した土器のように、胴部を丁寧に磨く古い様相をもつものにも扇状の圧痕がみられ、比較的粗雑なつくりのものに押圧しただけの圧痕がみられる場合もあり、細かい属性については前後関係を再検討する余地があると考える。

このように、①、②の特徴の中にも調整の丁寧さに若干の違いがみられることから、これらの土器をさらに細分することも念頭におくべきである<sup>注2</sup>。

なお、少数はあるが、第16図1のように縄文を施した後にヘラによって横方向に刻みを入れるものや、口縁の内面に凹線を1条施し、凹線と口縁との間に刻みを入れるもの（同2、3）などがある。これらは後期後葉の中でもやや古い様相を呈しており、型式編年では彦崎K II式の範疇で捉えられよう。

今回検討したT-2-22出土の縄文土器は、遺物包含層での一括資料として取り上げたものであるため、細かい地点での取り上げが行われていない。また、今回の出土点数からは、福田KⅢ式という1つの型

式内における属性分析が十分行なうことができないのも事実であり、今後の調査が待たれるところである。

## (2) 石器について

今回の調査で出土した石器の多くは T 2-22 から出土したものである。これらは、縄文時代後期後葉を中心とした時期に属するもので、同じく縄文時代後期から晩期に属する T 2-21 出土石器とあわせ、当該時期の石器のもつ特徴をまとめておく。

石器組成については、石鎌、石匙、打製石斧がある。その他に石器製作に関連すると思われる資料として叩き石、石核、剥片、碎片が出土している。叩き石と打製石斧以外の石器石材はサスカイトである。全体の数量が少ないので本来の組成を示していない可能性もあるが、石匙以外の削器を欠くことが注意される。

石鎌は概して小形で、長さ 2 cm 以内のものが主体を占める。基部形態は平基ないし凹基式で、前者がやや多くみられる。調整加工は、剥離面が中央部に達するもの（第 22 図 4・6・9）に加え、周辺部に限られ主剥離面を広く残すもの（第 22 図 5・7・8・10）もみられ、後者は弥生時代石鎌に共通する。石匙は横形で、やや尖った一端に顕著な摩擦痕を留め、使用法を示す資料である。

打製石斧については、T 2-26 でも出土していて、今後の調査でより詳細な所属時期が判明するものと思われる。

サスカイト製石器製作を示す石核は、大小の二者に分類される。大形のもの（同 16）は 1 点のみで、大部分は幅 2 cm 程の残核と呼ぶべき小形品（同 13～15）である。いずれも「楔形石器」と呼ばれているものに類似する。16 は扁平な剥片を素材とし、上下だけでなく多方向からの剥離痕が認められる。共に出土した剥片（同 17）の背面も多方向からの剥離面で構成されていて、このような石核から得られたことを示している。この石核は剥離作業中に折損しており、打面などの調整と考えられる小剥離面が周辺に残る。これに対し、小形品は上下からの剥離痕を残すものが多く、「両極技法」が用いられたと考えられる。極限まで剥離し尽くした形状であるが、大形石核（16）の剥離行為が進行した結果としてこのような形態になったのか、大形石核から得られるような剥片を素材として「楔形石器」状の石核となったのかどうかは判然としない。両者とも該当する場合の可能性もあるが、これらの資料は石材原産地から遠く離れた消費地におけるサスカイト製石器製作の状況を示している。本品と石匙および剥片には白色風化自然面を一部を留めていて、多量の碎片の出土とあわせて考えれば、一部に自然面を残した比較的大形の剥片が遺跡内に持ち込まれ、石器製作作業が行われたと考えられ、原産地の同定が今後の課題である。

石器製作に関わる可能性が高い資料に叩き石がある。円礫の周辺と表裏面の中央に敲打痕をもつ種類（同 1・2）と棒状礫を利用するもの（同 12）に分かれ。特に前者は、当地域の弥生時代にも一般的に認められる形式で、上記したサスカイト製石器製作と密接な関係があると考えられる。

注 1 和田は、宮浦式土器について、器種ごとの詳細な属性分析を行うことにより、4 段階に分類している。卷貝の圧痕文は、押圧捺過（I 種）、押圧（II 種）、回転（III 種）の 3 種類に分類されており、押圧→押圧捺過→回転の順に新しくなるものとさえられている。

注 2 平井泰男は、縄文時代後期末葉（本報告書では後葉としている）の土器を 3 段階に分類している（平井 2000）。2-22 土器の土器はこの中で第 2 段階に位置づけられるが、平井は第 2 段階をさらに古段階と新段階に分ける可能性を指摘しており、この見解に賛同するものである。

## 参考文献

- 泉拓良 1979 「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集』 I 日本原始 小学館
- 下澤公明ほか 1988 「舟津原遺跡・阿津走出遺跡」『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査II』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 71) 岡山県教育委員会
- 丹治康明 1980 「宮漣式再考」『藤井祐介君追悼記念 考古学論叢』
- 平井泰男ほか 1996 「百間川原尾島遺跡5」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106) 岡山県教育委員会
- 平井泰男 2000 「中部瀬戸内地方における縄文時代後期末葉から晩期の土器編年試案」『突帯文と速賀川』  
土器持寄会論文刊行会
- 間壁忠彦・間壁蘿子ほか 1979 「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第 14 号 倉敷考古館
- 和田秀寿 1999 「宮漣式土器の再検討」『考古学雑誌』第 84 卷 第 2 号

番号	トレンチ	器種・部位	調整		色調		備考
			外面	内面	外面	内面	
14-1	T28	鉢口縁	ナデ	ケズリ	淡黄褐色	黄褐色	口縁外面にR L 織文
14-2	T28	鉢口縁	ナデ	ケズリ	淡黄褐色	黄褐色	外面に沈継2条
14-3	T213	深鉢口縁 条痕	ナデ	ナデ	赤褐色	淡黄褐色	外面に突起、刺み、口縁端部に削み
14-4	T213	深鉢口縁 条痕	ナデ	ナデ	淡黄褐色	黑灰色	口縁端部に削み、内面に煤付着
14-5	T213	深鉢口縁 条痕	ナデ	ナデ	白黄褐色	黑灰色	外面に突起、刺み、口縁端部に削み
14-6	T213	深鉢口縁 条痕	ナデ	ナデ	白黄褐色	淡褐色	外面に突起、刺み、口縁端部に削み、内面に煤付着
14-7	T213	深鉢口縁 ケズリ、ナデ	ナデ	ナデ	淡灰褐色	淡褐色	口縁内面肥厚、内面に煤付着
14-8	T213	鉢口縁 ミガキ	ナデ	ナデ	白灰褐色	白灰褐色	内面に沈継1条
15-1	T225	深鉢口縁	ナデ	ナデ	淡茶褐色	暗茶褐色	口縁外面肥厚、R L 織文
15-2	T225	深鉢口縁	ナデ	ナデ	墨灰色	黑灰色	口縁外面肥厚、R L 織文
15-3	T221	口縁	ナデ	ナデ	褐色	淡黄褐色	外面に沈継2条
15-4	T221	深鉢口縁	ナデ	ナデ	暗灰褐色	暗灰褐色	口縁外縁とんど肥厚せず、R L 織文 内面に煤付着
15-5	T221	胴部 織文	ケズリ	ナデ	淡茶褐色	暗茶褐色	R L 織文、内面に煤付着
15-6	T225	胴部 織文	ナデ	ナデ	淡黄褐色	黑灰色	R L 織文、内面に煤付着
15-7	T225	胴部 のり消し織文	ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	R L 織文
15-8	T221	底部	ナデ	ナデ	白黄色	淡褐色	外面に煤付着
15-9	T221	底部 ケズリ、ナデ	ケズリ	ナデ	黄褐色	黄褐色	内面に煤付着
15-10	T221	深鉢口縁	ナデ	ナデ	黄褐色	褐色	口縁端部に削み、内面に煤付着
15-11	T221	胴部	—	—	黑灰色	黑灰色	外面に突起、刺み
15-12	T221	口縁	ナデ	ナデ	黄褐色	淡黄褐色	外面に突起、刺み
15-13	T221	鉢胴部 条痕、ナデ	ナデ	ナデ	白黄褐色	白黄褐色	
15-14	T221	深鉢胴部	ナデ	ナデ	褐色	赤褐色	外面にヘラ描文
15-15	T221	鉢胴部	ナデ	ナデ	黄褐色	黑灰色	外面にヘラ描文
16-1	T222	深鉢 L.R 織文、ナデ	ナデ	ナデ	黑灰褐色	黑灰褐色	外面に横方向の削み
16-2	T222	鉢	ナデ	ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	外面に沈継2条、内面に沈継1条、削み
16-3	T222	鉢	ナデ	ナデ	白黄色	白黄色	外面に沈継2条、内面に沈継1条、削み
16-4	T222	鉢 ミガキ	ミガキ	ナデ	淡褐色	淡褐色	外面に沈継1条
16-5	T222	鉢	ナデ	ナデ	淡黄褐色	黑灰色	外面に沈継2条、内面に沈継1条、円形剥突文
16-6	T222	深鉢	ナデ	ナデ	黑褐色	黄褐色	外面に巻貝沈継3条、内面に沈継1条
16-7	T222	鉢	ナデ	ナデ	淡黄色	白灰色	外面に沈継2条、内面に沈継1条
16-8	T222	鉢	ナデ	—	黄褐色	黄褐色	外面に沈継2条、内面に沈継1条
16-9	T222	鉢	ナデ	ナデ	淡褐色	暗褐色	外面に沈継2条、内面に沈継1条
16-10	T222	鉢	ナデ	ナデ	黑褐色	黑褐色	外面に沈継1条
16-11	T222	鉢	ナデ	—	淡黄褐色	淡黄褐色	外面に沈継2条
16-12	T222	鉢 ミガキ	ミガキ	ナデ	淡褐色	淡褐色	外面に沈継2条
16-13	T222	鉢	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	外面に沈継2条
16-14	T222	口縁 ミガキ	ミガキ	ナデ	黑褐色	黑褐色	外面に沈継2条
16-15	T222	口縁 ミガキ	ミガキ	ケズリ、ナデ	淡灰褐色	淡灰褐色	外面に沈継3条、巻貝压痕(粘土貼り付け)
16-16	T222	口縁口器	—	—	—	—	外面上に巻貝压痕
16-17	T222	鉢胴部	ナデ	ケズリ、ナデ	淡褐色	淡褐色	外面に沈継2条
16-18	T222	胴部	ナデ	ナデ	淡褐色	淡黄褐色	外面に沈継3条
16-19	T222	鉢胴部	—	—	淡黄褐色	淡黄褐色	外面に沈継3条
16-20	T222	胴部	ナデ	—	黑褐色	淡黄褐色	外面に沈継3条
16-21	T222	口縁	ナデ	ナデ	淡灰色	淡灰色	外面に沈継1条、巻貝压痕、刃突文、擬織文
16-22	T222	胴部	ナデ	ナデ	白黄褐色	白黄褐色	外面に沈継2条、巻貝压痕(粘土貼り付け)
16-23	T222	胴部	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	外面に沈継2条、巻貝压痕
16-24	T222	胴部	ナデ	—	淡黄褐色	淡茶褐色	外面に沈継3条、巻貝压痕
16-25	T222	鉢胴部 ミガキ	ミガキ	ナデ	淡灰褐色	淡灰褐色	外面に沈継3条、巻貝压痕(内面に粘土貼り付け)
16-26	T222	鉢胴部	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	外面に沈継2条
16-27	T222	鉢胴部 ナデ、ミガキ	ナデ	ナデ	黑褐色	黑褐色	外面に沈継2条
16-28	T222	浅鉢	ナデ	ナデ	淡黄褐色	暗茶褐色	口縁内面に粘土貼り付け
16-29	T222	跡口縁	ナデ、ケズリ	ケズリ	淡黄褐色	黄褐色	口縁に突起、刺み
17-1	T222	鉢	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	外面に沈継2条
17-2	T222	鉢	—	—	淡黄褐色	淡黄褐色	外面に沈継2条、内面に沈継2条
17-3	T222	鉢	ナデ	ナデ	淡赤褐色	淡赤褐色	外面に沈継2条
17-4	T222	鉢	—	ナデ	明褐色	暗灰褐色	外面に沈継3条
17-5	T222	浅鉢?	ナデ	ナデ	黑灰褐色	淡灰褐色	外面に巻貝沈継3条
17-6	T222	浅鉢?	ナデ	ナデ	黑灰褐色	黑灰褐色	外面に巻貝沈継3条

第1表 織文土器観察表(1)

17-7	T2-22	浅鉢	条痕	条痕、ミガキ	黒褐色	黒褐色	外面上に巻貝沈継2条、巻貝圧痕上下2段 内面に沈継1条、円形剥突文2箇所
17-8	T2-22	鉢	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	外面上に巻貝沈継2条、巻貝圧痕（頸状）粘土貼り付け
17-9	T2-22	深鉢	条痕、ミガキ	ナデ	淡褐色	淡褐色	外面上に巻貝沈継2条、巻貝圧痕（頸状） 側部に巻貝沈継
17-10	T2-22	浅鉢	ケズリ	ナデ、ミガキ	淡黄褐色	淡黄褐色	外面上に巻貝沈継4条
17-11	T2-22	深鉢	巻貝条痕、ケズリ	ケズリ、ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	外面上に沈継2条、側部に沈継1条
18-1	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	内面に沈継1条
18-2	T2-22	深鉢	-	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	内面に沈継1条
18-3	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	内面に沈継1条
18-4	T2-22	深鉢	-	ナデ	黒褐色	黒褐色	内面に沈継1条
18-5	T2-22	深鉢	ミガキ	ナデ	黒灰褐色	淡灰褐色	外面上に巻貝沈継、内面に沈継1条
18-6	T2-22	浅鉢	ナデ	ナデ	灰褐色	淡褐色	
18-7	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	灰褐色	淡褐色	
18-8	T2-22	深鉢	条痕、ナデ	ナデ	黒灰褐色	淡黄褐色	
18-9	T2-22	深鉢	条痕、ナデ	ナデ	白黄褐色	白黄褐色	
18-10	T2-22	深鉢	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	白灰色	白灰色	
18-11	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	新褐色	新褐色	
18-12	T2-22	深鉢	巻貝条痕、ナデ	ナデ	黒褐色	白黄褐色	内面に沈継1条
18-13	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	新褐色	新褐色	
18-14	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	
18-15	T2-22	深鉢	条痕、ナデ	条痕、ミガキ	淡灰褐色	淡灰褐色	
18-16	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	黒茶色	黒褐色	
18-17	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	白黄色	白黄色	
18-18	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	灰褐色	淡黄褐色	
18-19	T2-22	鉢	ケズリ、ミガキ	ケズリ	赤茶褐色	明茶褐色	
18-20	T2-22	深鉢	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	黒褐色	黒褐色	
18-21	T2-22	深鉢	ケズリ	ケズリ、ナデ	白黄褐色	白黄褐色	
18-22	T2-22	深鉢	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	内面に煤付着
18-23	T2-22	深鉢	条痕、ナデ	ケズリ、ナデ	白黄褐色	白黄褐色	
19-1	T2-22	底部	ナデ	ナデ	淡褐色	淡褐色	
19-2	T2-22	底部	ナデ	ナデ	褐色	褐色	
19-3	T2-22	底部	ナデ、ミガキ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	
19-4	T2-22	底部	ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	
19-5	T2-22	底部	ナデ、ケズリ	ナデ	淡褐色	淡褐色	
19-6	T2-22	底部	条痕、ナデ	条痕、ミガキ	淡褐色	淡褐色	
21-1	T2-38	跡口縁	ナデ	ケズリ	淡黄褐色	淡黄褐色	外面上に突壘、剝み
21-2	T2-38	跡口縁	ケズリ	ナデ	淡黄褐色	黒褐色	外面上に突壘、剝み、縫部に剝み
21-3	T2-38	跡口縁	ケズリ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	外面上に突壘、剝み、縫部に剝み
21-4	T2-38	口縁?	ナデ	ナデ	赤褐色	白黄褐色	剝み
21-5	T2-38	跡口縁	ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	外面上に突壘、剝み、内面にヘラ描文
21-6	T2-42	胸部	織文	ケズリ	黃土色	暗灰褐色	
21-7	T2-38	深鉢口縁	-	ケズリ、ナデ	褐色	淡黄褐色	外面上に突壘、剝み、煤付着
21-8	T2-38	側部?	ミガキ、ケズリ	ミガキ	黒褐色	暗灰褐色	

第1表 繩文土器観察表(2)

辨図番号	トレンチ	出土層位・遺構	種類	石 材	長さ cm	幅	厚さ	重量 g	備考
7-21	T1-17		石包丁	片岩	12.7	6.2	1.2	108.5	一部欠損
22-1	T2-21	上層	叩き石	花崗岩	10.5	9.7	6.4	905.0	
22-2	T2-21	P 3	叩き石	ピン岩	9.4	7.1	6.1	573.0	円錐素材
22-3	T2-21	P 3	打製石斧	緑色片岩	6.3	4.2	1.1	38.5	下半部欠損
22-4	T2-22		石鏃	サヌカイト	1.8	1.4	0.3	0.6	出土層位不明
22-5	T2-22		石鏃	サヌカイト	2.2	1.8	0.2	0.6	同上、一部欠損
22-6	T2-22		石鏃	サヌカイト	2.1	1.4	0.3	0.6	同上
22-7	T2-22		石鏃	サヌカイト	2.1	1.6	0.2	0.5	同上
22-8	T2-22		石鏃	サヌカイト	1.9	1.7	0.4	0.7	同上、未製品
22-9	T2-22	暗茶褐色土層	石鏃	サヌカイト	1.0	1.4	0.2	0.3	基部のみ
22-10	T2-22	漿状落ち込み底面付近	石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.3	0.6	
22-11	T2-22		石鏃	サヌカイト	3.7	5.7	0.9	18.7	出土層位不明
22-12	T2-22	茶灰褐色土層	叩き石	頁岩	11.4	2.0	2.0	58.0	同上、頭部欠損
22-13	T2-22	暗茶褐色土層	石核	サヌカイト	2.0	3.8	0.7	4.4	
22-14	T2-22	暗茶褐色土層	石核	サヌカイト	2.0	2.7	0.6	3.6	
22-15	T2-22	暗茶褐色土層	石核	サヌカイト	2.7	2.9	0.9	7.7	
22-16	T2-22	茶灰褐色土層	石核	サヌカイト	7.4	7.3	2.0	121.5	白色風化自然面を残す
22-17	T2-22		剥片	サヌカイト	4.5	5.4	0.7	12.5	白色風化自然面を残す
23	T2-26	黒褐色土上層	打製石斧	片岩	9.6	4.5	1.1	65.0	

第2表 石器観察表

図 版



第一次調査

T2 (南東から)



T4 (南東から)



T9 (南西から)

